

# 風土



### 三寒の四温を待てる机かな

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

年譜に拠ると、この年の一月十七日より風邪をこじらせて肺炎になり、二月五日の全快まで半月寝込んでいます。この句の「三寒四温」は、肺炎の症状が峠を越えた頃を想像させます。七畳小屋の原稿が山積みの机を見つめつつ、春がやって来るのを心待ちにしているのです。ちなみに起き上がるのもままならないので、この句は口述筆記によるものと記されています。

### 鶴ゐてくちぎみしさの飴を乞ふ

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

この句も、まだ肺炎で臥せているときのものです。鶴は晩秋にシベリアから渡来し、日本で越冬し、春になると帰ります。雀ぐらいの大きさで、「ヒ、ヒッ、ヒッ」と鳴き、嘴をカタカタと鳴らす特徴があります。桂郎氏は、七畳小屋の竹藪にやってきた鶴を聞きとめるほど快復してきました。まだお酒は禁止されているので、「くちぎみしさの飴」をねだっているのです。

病む妻に灯台めけり黄水仙

(句集『幻』より平成七年作)

器師の最愛の妻が倒れたのは平成五年の冬です。救急車で病院へ運ばれた時、「救急車霜を降らす妻のこゑ」と詠んでいます。その後も正月や盆の一時帰宅以外は病院の生活です。この句も病院へ見舞に行ったときのものと思われます。倒れてからもう二年になろうとしています。花器に挿した「黄水仙」が病室をぱつと明るくし、その鮮やかな黄色と芳香に妻の眼が輝いています。器師は心ひそかに灯台のように妻の生きる導きになつてくれればと願うのです。

芽吹かざるものに苗札大きかり

(句集『幻』より平成七年作)

苗木市の一齣でしょう。境内の凸木を一巡りして、「おやつ」と気が付いたのです。筵に積まれている棒切れの山に値札が貼られているではありませんか。苗木市の主に訊ねると「これから芽が出る」とのことです。器師はその苗札のりっぱなことに興を示し、一句と成したのです。それにしても何の木でしょうか。

白こそよけれ

南うみを

落ち果てて鮎あはうみにうらがへる

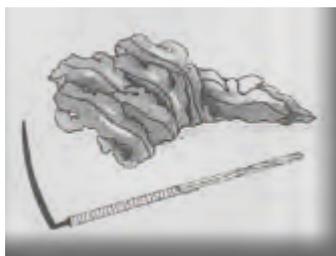
光りつつあはうみ渡るしぐれかな

水かげろふ棲みついてゐる障子かな

濁声のかたまり過ぎる花八手

遠目にも大根畑の盛り上がり

木枯のはたては捨菜飛ばしけり  
ペットボトル風の冬田をころがれる  
枯野人なま臭きもの担ぎ来る  
けもの道跨ぎて摘めり冬いちご  
波郷忌の白こそよけれ冬椿  
喪のこころ脱がずしばらく冬ざくら  
尖るものいよいよ光り冬の雨



# 竹間集

同人作品



雪催ひ

小林輝子

まだ風化しては居られぬ冬囲  
いぶり大根二百漬け込む納屋灯し  
小半日かけ仕上げたるきりたんぽ  
素つぴんを隠せるほどのマスクかな  
きらめける銀杏落葉を掬ひ老ゆ  
りハビリの千六本に挺摺れる  
雪催ひ遺影がわんと応へさう

桂郎忌

田村すゝむ

手袋を脱ぎてゲートに検査待つ  
誰が為の命と思ふ初紅葉  
綿虫や死後に追伸などはなし  
雪催ひ幻の器の行く先は  
桂郎忌新宿「ボルガ」の止り木に  
十一月は桂郎忌また杏雨の忌  
それとなく寄り添ふて来る秋螢

冬の鹿

田中佐知子

冬耕の畝まつすぐに日本海  
艦過ぐと湾に張りつく牡蠣筏  
十二月すでに供花ある父母の墓  
底冷えの闇に目の慣れ釈迦如来  
奈良なれやなつかしき瞳の冬の鹿  
嚏をしてモナリザと目の合ひぬ  
十二月ゆるやかに雲行き違ひ

返り花

中村 洋子

絵タイルの舗道山茶花日和かな  
綿虫の舞ふ山ふところの無言館  
遠き日の友情に似て返り花  
みづからの重みに揺れて破れ蓮  
ポスターはみんな笑顔の小春かな  
やさしさは時に疎まし帰り花  
ふくらはぎ叩いてほぐす神の留守

蕪稲架

橋添やよひ

湖へ立ててあふみの蕪稲架  
兜煮のあつあつの湯気神の留守  
秋日濃し社家に残れる禊の井  
成すことの多き余生や衣被  
顔見世のおねり松本幸四郎  
秋風の吹き抜けてゆく通し矢場  
こころせる速歩の日課一葉忌

日向ぼこ

浅田 光代

洛北のすくとんと暮れて稲架の棒  
冬立つやきれいにたたむ新聞紙  
外反母趾触れて勤労感謝の日  
着ぶくれてエンドロールをながながと  
自転車に青葱積んで流れ橋  
赤んぼの重さを忘れ日向ぼこ  
陪塚の松のしぐれてゐたりけり

冬銀河

柿沼 盟子

青檸檬山への口に鉄の門  
北少し晴るる空あり渡り鳥  
枯れ園となるに間のある日差しかな  
大綿や雲切れてきし東山  
山門の外海のごと冬の靄  
父母を塔に納めて冬すみれ  
戸主となる覚悟あらたに冬銀河

冬ひと月

柿沼 盟子

徒長枝の色淡きまま枯れ初むる  
石路咲くやかつては川でありし道  
山手線の窓にときどき冬紅葉  
また替はる一軒の店神の留守  
センサー新幹線に閉まらぬドアや冬の蠅  
パソコンを打つ音朝の暖房車  
北風の折る太き煙や富士裾野  
案の定しぐるる雲の通りみち

伊吹山越ゆれば雪の景となり  
縁紅きさざんか門前清められ  
大綿や閑伽桶の棚乾きゐて  
ストーブの風低く来る弥陀の前  
御下がり冷たき柿を六つ受く  
雪催ひのつぺり見ゆる海鼠壁  
裸木を黒く染め上げ雨止みぬ  
土湿り明日は立つらむ霜柱  
室咲きや床の高さに高瀬川  
凍雲や駅ビル高く建設中  
残業を嫌とは言はずポイントア  
ポケットの左右に手袋片手づつ

# 山河集

同人作品



南うみを選

子規居士に十一月の鶏頭花  
石路の花土葬の子規をおもひけり  
じよつぱりも肥後もつこすも新走  
干鮭のたましひのみなぶらさがる  
啄木鳥や即身仏は何思はむ

雨宮 桂子

冬わらび軽く胞子を放ちをり  
肘とがり膝とがりみて蓮根掘る  
千歳飴引きずり上げて見せにけり  
編み掛けの毛糸に妻の顎かな  
枯枝のよく見えてみて鳥とばす

山田 健太

日輪へ入りて消えたる冬鷗  
秋うらら織布のやうに浮く鷗  
秋簾巻かれ丸太のごとくあり

瀬戸 薫

翔つ鴨の足は水面を滑りつつ  
文字未だ彫らぬ墓石寒の雨

冬帽子攫ふや能登の荒しぶき  
岡本 尚子

電子音に確かむ命冬銀河  
グレーヘアに選ぶまつ赤な冬帽子  
夕風に葦火猛りし翁の忌  
朝焼けに染まり綿虫潑漑と

妻の身を案じし芭蕉棟の実  
奥田 茶々

鴨来る確かに聞きし笑ひ声  
器先生蕎麦屋に脱がぬ冬帽子  
葦原の眠りを誘ふ水の音  
戻り来る十石舟や干大根

# 風土独語／南 うみを



もう後へ戻れぬ冬の石榴かな

南奉 栄蓮

作者の一連の句から現在病に臥していることがわかります。この句はその中でも屹立して迫ってくるものがあります。モノの在り様がそのまま命の在り様を伝えていきます。わが命を見つめる透徹した心が呼び寄せた世界です。

子規居士に十一月の鶏頭花

雨宮 桂子

この句は子規の「鶏頭の十四五本もありぬべし」を踏まえています。カリエスに苦しみながら、到達した子規の「写生」の代表句です。忌日は九月十九日ですので、「十一月の鶏頭花」を見る事は適いませんでした。枯れかけた「鶏頭花」を目の前に、作者は子規に問いかけているのです。

肘とがり膝とがりみて蓮根掘る

山田 健太

俳句はまず見えるように描くことが大事です。ここでは「肘とがり膝とがり」が、蓮根掘の姿を描いています。と同時に蓮根の節々の曲がり具合も想像させます。巧みな句です。

マスクして街の半分見失ふ

片桐紀美子

マスクの句は顔に焦点を当てやすいですが、作者は「街の半分見失ふ」とずらしました。これはマスクをした時、見慣れた景がまるで変って見えてしまう感覚をことばにしたものなのです。

秋簾巻かれ丸太のごとくあり

瀬戸 薫

夏のあいだお世話になった簾を巻いたので。色が褪せ、風雨にさらされ、膨らんだ簾を巻き終ると、まるで丸太ではありませぬか。「秋簾」の特徴をよく掴んでいます。

崩しつつ一直線に鳥渡る

佐藤やすこ

「渡り鳥」は棹形や鉤形の編隊を組んで飛来してきます。その形が「崩しつつ」はよく見られる景ですが、「一直線」のことがこの句を引き締め、力強さを伝えて佳句になりました。

冬帽子攫ふや能登の荒しぶき

岡本 尚子

俳句にはポイントになることがあります。この句では「能登の荒しぶき」がそれです。読み手は冬の能登の荒波に真向かう人物の「冬帽子」が、空へ吹き飛ばされる景を想像するのです。

器先生蕎麦屋に脱がぬ冬帽子

奥田 茶々

この句を読むと誰もが、鏝広の冬帽子に赤いマフラーをしたダンディな器先生を思い起すでしょう。いきつけの蕎麦屋での一齣ですが、すぐには帽子を取らない先生を彷彿させます。

〈以下略〉

# 風土集



## 南うみを選

山嵐といふ喝采に銀杏舞ふ  
南丹 南奉 栄蓮

溪谷の紅葉行脚や水のこゑ  
もう後へ戻れぬ冬の石榴かな  
延命の中止遺言冬に入る

細つたねと友に言はれて一葉忌  
軒先の日和つづきに枇杷の花  
平塚 片桐紀美子

小春日や野鳥の森の覗き窓  
函嶺の山並透かす冬紅葉  
神迎へ島の灯台立ち上がり  
マスクして街の半分見失ふ  
白鳥の川サイレンの鳴り響く  
いわき 佐藤やすこ

尻上げてみな水中へ尾長鴨  
崩しつっ一直線に鳥渡る  
綿虫や川縁に追ふ母の影  
菊の香の匂ふ友の手夕支度

山茶花や山廬にあまた竹箒  
東京 奥田 茶々

黄身二つめでたき卵今朝の冬

雄叫びを上げて大根踊りかな

ひとつ消え綿虫の来るまたひとつ

湯上りの坊ちやん団子冬ぬくし

金色の光ちらして冬わらび  
綾部 四方由紀子

赤々と海へ弾けて真弓の実

満天星紅葉の垣根や嬰の声

枇杷の花散らして叔父の屋敷跡

水害の復旧工事霧深し

指先を離れぬ綿虫とあるく  
福生 雨宮 桂子

開眼の地蔵まばたく初しぐれ

冬蜂のあまりにとほく来過ぎたる

千年の櫂の洞や神迎  
秋灯や古本市のはしやぎだす